
“ Galactic ILLUSION ” (銀河幻想) The ORPAHN III

レイ@名無し

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

“Galactic ILLUSION” (銀河幻想) The ORPAHN III
e ORPAHN III

【Nコード】

N1262E

【作者名】

レイ@名無し

【あらすじ】

III・宇宙篇（諸事情により不定期更新） 『空白の言葉』から一千年後、『千年の夢幻』から一千年前 “緋い大帝”（グランド・カーブ） 後々にそう呼ばれる皇帝が即位した。 太祖ユーデリウスがルイーザと帝政共同体の礎を築いてから一千年が経ち、運命は何者かの手によって宿命へと否応無き変遷を遂げた 歴史の狭間にはギャラクシアン・グループ、時代の影には「遺伝子監視委員会」、いったい誰が時を刻むのか しかし微かな選択は自らの手

“Galactic ILLUSION” (銀河幻想) The ORPAHN III

にもあると云う。それぞれの「絆」が連なる、その先で

1 『序文』 - 1 (前書き)

「千年の夢幻」から一千年前“とされ”、
「空白の言葉」より一千年後。

この物語は、「絆」がテーマです。

1 『序文』 - 1

人の前に星が在り、
星の前に宇宙が在り、
さらなる以前に
光と呼ばれるもの。在り。

それは
光になる前のものだった。

やがてそれは
“思い”を始める。

それこそが人の苦しみの
始まりでもあった。

人はどこから来て
どこへ行くのか

幾代も人は
問い続けました

突然の虚無感ほど
辛いものは無く

ここに居る理由も
為す事の意味も

何より己の存在に

“Galactic ILLUSION” (銀河幻想) The ORPAHN III

ついて

“それ”は
お応えになつた

あなたがたの
存在や

人生は

とても大切な

意義あるものなのです

人はそれでも
尋ねました

我々は何故に
存在するのか

理想と希望を
求めても

妄想と絶望に
すり換えられ

何をしても

永遠の中に

何一つ残らず

一握の砂にも灰にも
なりはしないものを

儂い野心さえ
破られて

“Galactic ILLUSION” (銀河幻想) The ORPAHN III

憤りだけが
魂に杭打つ

世が無常と
言つのなら

欲に生きるか
欲を棄てるか
ふたつに限り

そして
賞賛と呪詛とを
唱うのです

ああ
人よ、人よ

一片の優しさも
踏み砕くのに

たやすき眠りは
決して
拒もうとはしない

その性^{さが}は
自らを嘲笑するためか
その身を
貶めるか

“Galactic ILLUSION” (銀河幻想) The ORPAHN III

久遠とわの終わりまで
同じ孤独を

分かち合うこともなく
分かち合えることも
できず

虚しい想いを
抱くのだろう

いままでも
これからも

「人はどこから来て
どこへ行くのか」

同じ言葉を
繰り返し
繰り返し

ファウンダー
太祖ユーデリウス大公がゆえなき急逝の後に、甥のレヴィンスは公の遺志を継いでルイーザと共に、星々がたゆとう宇宙に「帝政共同体」を創った。

その初代皇帝に即位すると、彼はユーデリウス二世を称し、以来歴代皇帝は「ユーデリウスの意を継ぐ者」という意味の「ユーデロイト」姓、皇帝称を受け継ぐのである。

しかし帝政は、皇帝の統治で成り立っているわけではない。

かつてユーデリウスにその才能を見いだされ、帝政を支えるべくルイーザにより創設された、「ギャラクシアン・グループ」の存在があったからである。

帝政の歴史は彼らによって造られているとも云われる。

一説によると、ルイーザが生前語り残した予見を元に、活動するらしいとも噂されるが、その存在理由や、活動内容の一切は明らかにされていない。

また、帝政共同体だけが何かの意思により息づいているわけではない。

袂を分かち、敵対勢力とされる星間自治連合にも、それ相応の影がある。

彼らもまた、時間の流れに沿って蠢いていた。

しかし、誰がそうしているのか。
人類は自らの意思で命を繋いできたのではないのか。
人と言うものは、自由を知っているのか。

知りたい者は、真実の歴史から意図を読めばよい。

読めない者は、読めぬままで良い。

やがて時代は、終焉を迎えようとしていた

3 Records 終焉の始まり

時はL・M・ラストミレニアム暦九八五年。

一人の少女が星間自治体連合から、帝政共同体に亡命した。

そのさらに十三年後のL・M・ラストミレニアム九九八年、今度は一人の青年が帝政から連合へ亡命する。

亡命自体はさして珍しいことではない。この二つの国の間では年間推定、数万単位で亡命者が行き来している。従ってそう注目すべきことではないのだが、まさか終焉劇の幕開けとなるうとは、誰も考えもしなかつただろう。

この二人の亡命は表沙汰にはおもてなならないまでも、両国の政治中枢に多大な震撼を与えるのである。

その一人、青年の名はヨーイン・アレクラ。

彼は帝政の第七十五代皇帝ルドニースの傍らで、帝政内では最高ロイヤルガードの栄えあるIMSになるはずだったが、その事実が何故か彼を亡命と言う行為に向かわせたのだった。

そして少女はデグレシア・エルマー。

在帝の連合公使エルマー一家の娘である。しかしこの家族は彼女を除いて、館内居住区で何者かに惨殺されている。第一発見者は、

たまたま外出していたデグレシア本人だったというのだが、警察が駆けつけたときには既に彼女の姿は無く、周囲から得られた証言はただ一つ。

『目が醒めるような蒼のローブ』

それもエルマー公使が死に際に、現場へ帰宅した娘に云ったらしい、と言うことだった。

『蒼いローブ』は、色的には珍しいものではあるが、決定的な証拠にはならない。

捜査は立ち消えとなった。

その日のニュースで、エルマー公使一家の殺人事件は両国でやや大きめに報じられる。

異なるのは、帝政がデグレシアの失踪を告げたのに対し、連合では何ら触れなかったという点であった。

後にこの事件は、ギャラクシアンに発端を起していると云われる。

4 Lyric 1 招待者の名は「TAKE 1」

彼はひどく胸騒ぎがしていた。
理由は分からない。

ただ繰り返し頭の中で、執拗に囁く声があるのだ。

“潜行セヨ”

気のせいにはしたが、抗いがたい強制力がある。

“潜行セヨ”

わずかな抵抗空しく従うことにする。

“時期デハナイ”

受け入れると同時に精神的な動悸が収まるのを感じた。

奇妙な緊張が解けて安堵の息をつくその隣に、心配顔の少女が小首を傾けて覗き込んでいた。

大丈夫、と頷くと少女はニコと微笑む。

(……………奇妙だ……………あれはもう二十年近く前のことじゃないか)
言い聞かせては見るものの、不安は払拭できたわけではなかった
ようだ。

自分の中に鎌首をもたげ蠢くものが何であるか、自分は知らない。
吐き気を催すほどの不快感はある。

押さえきれない、醜い蟲のような

沸き立つ群衆の中で、彼は独り冷や汗を額に滲ませた。

その視線の先には、うご豪奢で権威的な色を誇示した着衣で、気高げに立つ女が居る。

あれは……

あれは敵ではないはず……

傷は、つけてはならないもの。

(お前が、守る者だ)

守る者。

それすらも違和感がある。

自分が守るのは……

脇に立つ、こちらの少女ではないのか ?

多大なる疑念が汗のように纏わりついていった。

5 「TAKE 2」

“ズズ……ン……！”

激しい衝撃と共に、天地不明のまま何処かに叩きつけられた。痛みで声も出ないくらいだった。

艦内のアラームが酷く大げさに聞こえる、と思った途端に周囲の他の音も容赦なく耳に飛び込んできた。

何かが混乱を来たしている。

だが、何が起こったのか分からない。

口元を歪め固く閉ざしていた瞼を、痛みを堪えながら開いた。

眼前は白く霞んでいたが、それはすぐに煙が充満しているせいだ
と判断できた。

そういう「場」によくある、怒号と悲鳴が飛び交う。入り乱れる
足音。

床か、壁か、打ち付けられた背中の痛みを知る。少し、頭痛もする。

“背中か……”

周囲の喧騒をよそに、奇妙にも冷静に考えていた。

“どうしたんだ……”

ようやく、騒々しさの原因について考察しようとした。

「大丈夫でありますか？」

そつと胸の上に手を置かれた軽い圧感に、視線を向ける。

その先にいる者は、ホツとした表情をした。

しかし、彼の着衣を見て、突然思い出した。

“一瞬だ……記憶が飛んでいる……！”

ままならない身体をどうにか起こして、彼に訊ねた。

「艦が被弾しました」

ちょうど、その現場に居合わせて吹っ飛んだのだ。この騒ぎと、

自分の背中の中の痛みはそのせいだった。

“ 旗艦が被弾………？ ”

艦隊の收拾が心配だ。しかし、それよりも自分の傍らには「もう一人」が居たはずだった。

酷く気にかかる。

それだけ、身近で重要な人物なのだ。

排煙装置が壊れそうなほどに稼動している。

“……… 何処に……？”

明瞭な視界になっていく光景の中、目を凝らしてその姿を探す。さつきまで、自分のそばに。

「向こうにおられるようです」

援け起こしてくれた彼が、強張った表情で戻ってくると、肩を貸してくれた。

打ち身だけで済んだ様だが、メリメリと背中が悲鳴を上げる。

あちらに、と歩を進める先には、たった今まで自分と話をしていた人物が床に横たわっているのが見えた。

“ 良かった……… ”

撮り合えず、隔壁の作動が正常で艦外に吸い出されることも無かったのは幸いだ。

しかし、その安堵は狼狽あんどに変わる。

その横たわった身体の下には、まるで新品の絨毯じゅうたんを敷いたかのよううにに、鮮やかな色が広がっていたからだ。

“………！”

自分が蒼ざめていくのが分かる。

呼吸までが麻痺する。

“……… 將軍ッ！”

理性が切れかけた。

そんな事があるはずがない！

支えて貰っていた肩を振り払うと、急ぎ足で將軍の下もとに参じた。

“ 將軍！……… 將軍！”

自分には有り得ない態で叫ぶ。

足元が滑り、白い手袋が鮮血に染まるのも構わずに。

どうあっても、この人は、この方は、私が護らねばならないのに

！

どうしたのです！

なぜ、いま、このようなことが！

自分の人生で、一番恐ろしい事が起きていた。

“あなたが居なければ、陛下サイアーはどうされるのです！”

明らかに、どうしてか明らかに致命傷に見える。

だから何なのだ？

傷は関係ない。

この流れる血も関係ない。

ただ、あなたは生きているはずなのだ。

生きて

陛下サイアーが

私は、あなた達のために

！

「 応急処置を致します」

動揺で乱れた息のまま、自分は振り返った。

軍医が物哀しい表情で治療器具を携え、返事も待たずに処置を始める。

“………どうなのだ？彼はどうなるのだ？”

軍医に投げかけた質問が、口に出ているのかは判らなかつた。

任務を黙々と遂行する軍医は、少し間を置いてから視線を上げて言った。

「予断を許さない状況です。“レイゼン中将”」

レイゼン？

呼ばれて戸惑う。

その名　　その名は……

違う

俺は

ふいに女の声があった。それで彼は自分が我を忘れたように画像に見入っていたのに気がつく。

(　　なんだ……白昼夢……)

リアルすぎるほどの明晰夢だったのに、もう何かが思いだせない。

ただ妙に……胸が苦しい……。

しかし、あれは自分ではない。

そんな意識だけが残っている。

「何を見てるの……」知ってか知らずか、女は耳元で囁いた。

「……ごらん。新しい皇帝が即位したそうさ。若いな……」

「ヤダ、消してよ。そんなつまらないの」

男が二次元画像ばかり見ているからであろう、退屈していた女は細い指を伸ばして画像を消そうとする。その手を制して男は穏やかに彼女を諭した。

「たまにはお隣さんの勉強もしたらいい」

そこで初めて女は顔を上げてその画像を視界にとらえた。

「フフ……随分偉くなって」

「君ほどじゃないだろう」

「父様とオライリーがいての、あたしよ。ね、感想聞かせて」
「何のだ？」

「あの子は皇帝職に就くに、ふさわしいのかしら？」
「君も帝政籍を持つていたら、崇めなくてはならないだろうさ」
「お飾りにするには勿体無いと思ってるでしょ」

「玉座が彼女の焔で燃えている。と言ってみる。違うかサスターシ」

「悪くないわオライリー。ねえ、きつとそれが正しい」

女は含み笑いをすると、オライリーと呼んだ男の背後から絡めていた腕を解いた。

「……………それに、いい女だと言ったら？」

男は、すり抜けようとすると手首を捕まえて女を横に見上げる。

「マイアランド」があなたを愛する保証は無いのよ」

その手を振り払うと、サスターシは艶のある微笑で見下ろした。

「しかし私は愛してる」

負けず嫌いのように一人ごちて、男はモニターに視線を戻した。

「わがままの虫が始まった。欲しいなら好きにきなさいな……………祝電を送りたいわ。どうかしら、レイゼンでも通して」

「両国の関係を壊したくないのなら、彼とのあからさまな付き合いは控えてくれ。それに彼は陛下の世話係になった多忙な身だ。第一、姉がいるなんてトンデモない話じゃないか」

「ああ。残念。レイゼンまで取られたわ。あたしって可哀想な女。いい男には振られてばかり。何か飲みたいわ。貰うわね」

隣室に消えていく後姿に、ここは君の家かと思ってたよ、と言うとモニターの画面を切り替える。「呼び出し中」の字が点滅していたからだ。

すぐに初老の男が向き直るように現れた。

「見たか？」

開口一番、男より初老の男が先に質問してきた。

「ええ。感動生中継、素晴らしいショーでしたよ。ご覧になってま

したね、ヨーイン」

「当然だ。君が豪華さだけに目を捉われる男とは思えんが」

「買い被りかもしれません」多少の謙遜の後すぐに「クラオン帝は思う以上の人物かと」

「それだけか」

「感動を超えたものがあります。言葉にはし難いですね」

「だろうな。一応IMSのリストも目を通してみたが、ユーニスとセルディンが入っていた。それと治療者ヒールも前例の無い二名もの数がある。『D・O』はこの状況を把握していたのか？ まったくギヤラクシアンは」

ヨーインは顔をしかめた。

「レイゼンがIMSになったのは不思議ではありませんね。彼女を補つてあまるような人物は彼以外に無いのですが、タスカー氏こそが虚をつかれた人事」

タスカーの名前をわざと出して、ヨーインの反応を見る。

しかし相手は眉一つ動かさず、男を見ている。

「彼には彼なりの任務がある。何か？」

「いいえ。あなたの反応を見たかったですよ。それより、新しい皇帝陛下にご挨拶がしたい。謁見パーティに潜り込めますか？ 特別に高速艇を出してください」

「帝政とは絶縁しているわけではないから可能だろう。誰が出るのだ？」

「私が」

「クロイカントも御披露目とするか。手配させる。しかし帝政で今は『D・O』は名乗られん。星間自治連合の肩書きを用意しよう……皇帝とIMSメンバーのプロファイルを監視委員会で欲しがっている。私の手元には既にあるが、先にお前も目を通したほうがよいだろう。それから、『D・O』幹部会は中止する」

「他国の人事データは、発表後に入手するものですよ」

「なに、構わんよ。サスターシにデータ取りをするから研究

室に行くよう云ってくれ。私に苦情が来ている』
「彼女が仕事を怠けているのは親の責任です　じゃ　」
クロイカントは絹糸のような金髪を手櫛で整えて、無碍むがいにスイツ
チを切った。
彼はそういう男だ。

6 「TAKE 3」

グランス・タスカーは今年で四十一歳になる、ルードニース帝のIMSである。

太祖ユーデリウス大公の腹心であるグランス・ラングライと奇しくも同じ名前を戴き、同様の立場にもあるわけだが、やはりそこは時代が違っただけ事情が少々異なる。

現皇帝ルードニースの前のカイル公在位時より、次期皇帝の呼び名が高かった人物である。しかしギャラクシアンが選定したのはルードニースであった。

本人にはそのような野心も欲望も無かったが、皮肉にも大衆が持ち上げた勝手な人望は、彼の評判を幾分落とすのに役立つてしまった。

結局ルードニースのIMSという身分に収まったものの、同期のIMSに決まっていたヨーイン・アレクラの亡命騒ぎが、一部の政治家たち政治活動のためグランスの忠誠心を疑い利用しようとする。

これは「大気圏に突入し燃え尽きたチリ以下の話」とギャラクシアンの一笑に掻き消えたと言われる。

幸い、彼はくだらぬ世間話に煽られるような男ではなかった。それがIMSたる職務に在る者であり、IMSとしての仕事をこなし、ルードニースをよく補佐した。

今更ながら、こうしてみれば彼は、皇帝と言う地位ではそのキャラクターを発揮できないと言うのが良く理解できる。俗世っぽく簡単に言えば「器ではない」のだ。

「……カールシアが、か？」

帝政共同体首都星ルエラ中央都市キシトワル上空、太目の眉の

下に温和そうな瞳に藍の色を浮かべて、彼は久しぶりにレイゼンと会っていた。

IMSの制服では目立ちすぎるので、通常の帝政軍の簡易制服を着用している。そうすると少し貫禄のついた下士官のようにも見えるから、人とは不思議なものだ。ただし、近衛府の護衛つきで。

向かって座ろうとした青年は、知性を湛^{たた}えたやや冷たい横顔で相槌をうった。

カーキ色の髪と瞳が、凍ったような美しい旋律で人格を醸し出す。

「先程サンド・ルーヴェから…もうすぐ到着するでしょう」

「陛下はまだ退位を示しておられないが、ありうるか、レイゼン」

レイゼンと呼ばれた青年は、そうですね、と同意する。

「^{アカパレス}皇宮が少し騒がしい。間違いないだろう」

「そのように見られますか」

「いかにせよ、私は久しぶりにカロールシアに会えるのは確実かな？」

グランスは和やかに笑う。

「と言うより、会ってやっていただきたいという感じです」レイゼンも苦笑を返した。「大事な友人ですから」

「幾つだった」

「二十…もうすぐ五……になるはずですよ」

「もう、そんなになるか」

「はい。私の妹ユウキが彼女とはアカデミーで同期でした」

「長い付き合いだな。…お前とも」

レイゼンは恐縮した。

何故か彼らはいま昔、と言うよりレイゼンやカロールシアが幼い頃より交友があった。

カロールシアの場合は、『商談に行った筈の官庁でスカウトされた

外交官である『父親が広い人脈で知己を得ていたことによる。しかしレイゼン兄妹は何故かギャラクシアンの紹介であった。

どのような巡り合わせか、そして彼らはアカデミーで知り合い、今に至る。

理知的な鋭さを隠さない端正な顔立ちの青年は、フランスを見つめ返した。

「どうかなさいましたか」

「ギャラクシアンが……彼らがもたらすものは理解できないな」

カロールシアでさえ、ギャラクシアンの差し金ではないかと思えるのだ。

「ギャラクシアンに非があるかどうかは、私たちには判断できません。しかし彼らはユーデリウスとルイーザの言下により指南するのは、間違いのない事実です」

「…ユーデリウスの操り人形、と言うのだそうだ」

ギャラクシアン

枢密院ギャラクシアン・グループ。刻の狭間に見え隠れして形造る者たち。

遠くそれはルイーザと言う偉大な予見者による集団であり、フアウンダー・ユーデリウスの遺志を紡ぐ者たちでもある。

『ユーデリウスの操り人形』とは、星間自治連合が帝政人を卑下している言葉だ。

自らの意思によらず、ユーデリウスの亡霊の呪いのままに運命を定められていると、彼らは笑う。事実だが、真実ではないと反論するものもいるが、いずれか彼らの知らぬ未来で答えは出されるであろう。

「言わせて置けばよいのです。帝政が嫌になつたら連合でも何処でも行けば良いでしょう。そのような自由であれば、人は選択の余地があると思うのですが」

「正論だ。まったく」

額に掛かつてきた黒めの髪を撫で上げると、気を取り直したように話題を変える。

「レイゼン」

「はい」

「『D・O』のクロイカント・オライリーとは」

「……………先月、会いました」

「ヨーン部の部下と聞いている」

「その話ですが、『D・O』の独立は本物のようです。三年前にヨーンが連合評議会をはじめとする、表舞台から見かけなくなつた折に、『D・O』主席幹部にクロイカントを指名しています」

「自分は院政を敷くつもり……………いや、院政もどうか…評議会が議員籍を剥奪するのも近いのか…」

「クロイカントも実権の半分は有すると見ていますが、このままですと国がもう一つできることになります」

「自治区ではないと言うか……………連合からの分制はうまくいかないということだな。派手目な事態が起こる可能性は」

「対帝政への意思表明のために、独立戦争はやっておくべきだと、そんなニュアンスでしたが」

「フランスは嘆息した。」

「間違いでなければ陛下サイアーの交代にぶつかるかな。最悪、緊急動議で非常事態体制宣言が採択されなければ良いが、そんな事も杞憂と思っしかあるまい。面倒な時期にやってくれる」

「陛下にはご報告に」

「いや、ギャラクシアンも掴んでいるだろうから、我々は静観したほうが良さそうだ。必要なら下命がある」

「御意」

「そろそろ戻るとする。ありがとう」

「……………いえ、私のほうこそ時間を取って頂いて……………どうしても直接、と思いましたが」

立ち上がったグランズに、レイゼンは軽く頭を下げた。

その眼下には首都星ルエラの青い姿が広がり、けして広いとはいえない室内を仄かに照らし出していた。

そして、やはり一番気にかかる事を再度口にした。

「カロールシアには、いつ」

「彼女が呼び出された理由の片がついたらにしよう。逃げないように捕まえておいてくれ」

「お願いします」

グランズの背がドアの向こうに消えたのを見届けて、レイゼン

ミナツキレイゼン
水無月冷泉 は一人静かに考えている風に佇んだ。たまたす

手元のデータディスクを一本、取り出して内容照会をする。

暗がりにはレイゼンの顔を照らして、画面だけが明るく動作した。

「ギヤラクシアンに間違いは無い……か？」

彼の疑問を増幅させる幾つかのファイルがスライドする。

(後世の人間には面白い読み物になるだろうが 当面、我々には
厳しい現実に変わりは無い)

ただし、彼も「より深い渦中」に入ろうとは思わなかったはずだ。

7 皇帝、立(いた)つ

もし彼女を、誰かに準えるならば人々は口々に云う事だろう。

「第十二代皇帝エディッサ・ユーム・ユーデロイトか」と。

帝政初の女帝としてエディット・フレイム(エディツサ)は皇位に就いた。早くから帝王学を教授され半ば計画的になるべくしてなつた皇帝と云う。

その天才的な聡明さは誰の目にも明らかだったが、先走る頭脳に彼女の心は追いつけなかつたらしい。何が彼女の精神を蝕んだのか、恋人の存在、内乱の発生、権力抗争、そして彼女のゆえ無き幽閉。息を引き取る前には、彼女の心はここになかつた。

そんな女帝に比べるのは場違いかもしれないが、人は自分の都合のよいようにイメージを作り上げるものである。時に異なり、時に^{まこと}真を。

大衆がカリスマ的力を感じての評ならば、エディツサ帝も肯定するであろう。だが過去の英雄は現世に甦ることは無い。形を成さない期待と、前例からのイメージにズレを感じたことが、後の新しい女帝に《^{グランド・カーブ}緋い大帝》と言う称号を贈ることとなった。

“緋色”の由来は定かではない。ルイーザの言語録によるものとか、炎のような苛烈さを象徴したのだとか、または《^{ブラッディ・グレート}血染めの大王》を聴こえよくしたと言う説もある。しかしこれは《^{グランド・カーブ}緋い大帝》以後に捏造されたものとして“後世”では理解されている。

間も無く、グランズとレイゼンらが予測したとおりに、ルードニース帝は退位表明し、民生議会はこれを承認した。

その日の中央行政都市キシウトワルは晴れだった。もちろん気象コントロールをやっての話だが、よほどでない限りは天候をいじることはない。式典の担当者はきつと完璧主義だったのだろう。

見事なまでに晴天である。

普段はルエラ星上空に浮かぶ、皇宮アクアパレスに在る皇帝は、真下の地上であるキシウトワル市に降り、式典の準備を整え、その日を大安吉日とばかりに形式的な世紀のショーをやつてのける。新しい皇帝は名も顔も、其の時まで表向きは一般に広報されない。儀式の流れの中で公開され、大衆は世紀のイベントにその顔と名を記憶に刻むのが慣例となっていた。

帝政を代表する顔がヴェールの向こうでギャラクシアンにより決定され、一般に知らしめられずに進行されるのに、帝政の市民は抵抗感が無いらしい。

むしろ神格化された向きもあり、違和感も無い。少なくとも一千年はそのようにして皇帝が選ばれ、「帝政共同体」としての二重の権力構造は受け入れられている。

太祖ユーデリウスの以前よりある貴族王族諸侯の血筋も生き永らえており、特にそのような身分制度も当たり前前の多様な世界だった。

キシウトワルの中枢にある“神殿”と呼ばれる広大な敷地内に、神殿の名にふさわしく厳めしげな建物があり、入念な立ち位置とカメラ位置のセッティングがされる。

準備に数ヶ月を要したと言われるが、その儀式はルードニースの退位のためでもあり、新皇帝の即位の儀でもあり、そして国威高揚も兼ねて星間自治連合へアピールするショーでもあるために、国境から“神殿”内までの武装警備計画に時間が掛かるせいだった。

ともあれギリギリの警備ラインまで一般に開放された“神殿”内に、大衆が駆けつけ見守る中を荘厳で重厚な格調高い儀式は執り行われた。

幾人かの限られた者しか着用を許されない、黒と紫紺の典雅な装束を身につけた数名の者に囲まれて、帝政の統一行政長官のスピーチに続き、ルードニース帝が退位宣言を行ってから新皇帝をその場と呼んで皇位移譲の宣言がされる。

若い女帝の姿が現れると、歓喜の声がいつそう大きくなった。

薄いグレイツシユブルーの髪と、まるで太陽の光を受けてはプラチナの輝きをもって照り返し、月の滴を受けてはタンザナイトの冷たい煌きを放つ、その二重の表情を宿した瞳は、既に何者たるかの風格を漂わせて微笑む。

その背後には、彼女のためだけに選ばれたIMSが控えており、皇帝章であるホーン・ドロップ・ダイヤを彫りこんだ、ロイヤルカラー紫紺の制服に身を包んだ中にレイゼンとグランスの顔があった。

やがて皇位継承の立会人がギャラクシアンの承認を高らかに宣言して、ルイーザの祝福を述べる。異次元の世界をもつと観たい民衆の心理を無常にも振り切つて、式典は以外にも簡素にそこで幕が引かれた。

その後、新皇帝と新IMSたちは「二日後の謁見に、準備がごぞいます」と、式部官に身柄を拘束されて“神殿”に閉じ込められてしまう。

閉じ込められたといっても、広い“神殿”内ではいくらかの自由はある。と言うより仕事はしなくてはならない。幸いな事に、恐らくは今までよりも格段にサポート力のある環境で、各自はそれぞれにストレス解消とばかりに打ち込んでいた。

「少し疲れたようだ」

初老の男が眉間を指で押さえて、背もたれに身を委ねた。

「公、医師をお呼びしましょうか」

その肩にふわりと、優雅に細い手が置かれる。

「いや、それには及ばんが：陛下サイアーこそ休んだら良い」

「大丈夫ですよ。でも明後日の披露の宴がありますので、体調は見てくださいいただいたほうが」

「ありがとうございます。カロールシア」

「退位されても公務は続きますので、お待ちを。ああ、医務官。ルドニース公のご様子を診るように。今参ります」

「これは恐れ入る。陛下、最初の公務かな？」
「どうやらそのようです」
女帝の笑顔が弾けた。

ギヤラクシアンが彼女を皇宮アクアパレスに召致してから六ヶ月。

陛下、と呼ばれる身になったその人は、カロールシアだった。

今日、晴れの日に華々しく強烈な印象を放ったであろう煌きは、
けして式典の豪華な衣装によるものではない。二十四という年齢にありがちな若さと初々しさは否定できないが、凄みを帯びたような力は人を惹きつけた。

「公のお力添え無しには、謁見に人見知りしすぎてしまいますゆえ」

「これからの皇帝選びには、顔の広い人物を選ぶようにギヤラクシアンに言おう」

医務官が丁度入室してきたところで二人は笑ったので、彼は心持ち眉をひそめて足を止めた。

一方、理性の化身のような表情で、レイゼンは相変わらず慌しい時間を過ごしている。

「この人選か……」

八つ当たりに近いもので、そばに控える士官には判りえない毒を吐いていた。

「しかし、我々は式部官としてお世話しているので……彼の怒りの根源を思い当たらない様子で、士官は自分の立場を弁明した。

「わかっている。確かに君らは専門外だ。わかっている」

珍しく苛立ちを隠せないように、手袋を投げるように脱いだ。

(しかし、どうかしている……)

グラスには言った手前、否定はできないが感情はなだめられなかった。

気負いが、感情の表れとなったのだろう。

新しい皇帝のIMS人選は同時期に行われ、皇帝の在位中ほぼ全ての時間を皇帝のために費やす、一番忙しい公僕として知られる。

身辺警護はもちろん、公務の補佐・代行を執り行い、皇帝親政時にはより強力な権限を有する。特に実戦経験が無くても高い地位の軍籍を持つのは、有事の際に軍を動かせるようにとの配慮も含む。

出自は特に問わない。能力さえ認められればギャラクシアンの選定を待つのみだ。

基準も無い。ただし、ギャラクシアンが何を理由に選ぶのかは不明だ。

そうして選ばれたIMSは、大体が任務を果たす。ヨーインのように毛色の違うものも居たりはするが、皇帝の退位後も良き友として存在するため、「ご学友」とも呼ばれる。

その所以はギャラクシアン達が、IMSを皇帝の運命未来において必要な縁を持つ者ばかりを傍らに置くことに他ならない。

このように「皇帝のためにあるべき」IMSなのだが、レイゼンはクラオン帝の周りに不満がありすぎた。

彼らとは一週間前に引き合わされている。つまりレイゼン自身もカロールシア帝のIMSに選ばれていたわけだが、初顔合わせで驚いたのはグランスの姿に、であった。

大抵のIMSは一代仕えなのだが、グランスのように二代続けて任命されるのは珍しい。彼としては大賛成だ。しかしその他に問題があった。

(この二人を加えることに意味があるのか?)

(これでは皇帝を、故意に危険な目に合わせようとしているばかりか、帝政の中枢に刺激を与えすぎる)

任務上、彼の憤りは正しい。だが

「遅くなりました。明後日の宴に招待された方々の追加リストでございます」

その声に、冷たさを増していた顔のレイゼンは、感情を飲み込ん

だ。

「直前に追加とは、穏やかではないな」

「星間自治連合で多少変動があったようでございますが、我々はいかようにも対応せざるをえませんので」

「慣れているからいいだろう。私のファイルに転送してくれ」

「すました面持ちで式部官はコンソールに手を伸ばした。

「モニターもお点けします」

招待客のパーソナルデータがモニター一面に並んだ。

「これは連合だけか？」

「表向きはそのように。…警備責任者を？」

「いや、いい」

そこまで口を出そうとは思わない。ざっと目を通して、一人その顔に視線が止まる。

「は……」

彼の一瞬にして張られた緊張感を感じつつ、式部官は今度こそレイゼンを無視した。

彼も齡二十九となれば、まだ若い。

IMSの人数も特に定められていない。

やはりギヤラクシアンが必要に応じて選ぶからだ。

どういう必要性なのかは知りえないが、それでカロールシア帝の周りには計九名のIMSが集結した。

先帝より引き続きグランス・タスカー、帝政軍情報将校ミナツキ・レイゼン、彼の妹ミナツキ・ユウキ、警察官僚オークトー・アードレイ、アカデミー在学中のユーニス・ルエ、治療者レフ・ピアッツイ、同治療者サガイ・オスタ、銀河航路システム管理局警備部セルデイン・エーヒー。

彼らはカロールシアが皇宮アクアパレスに召喚された同時期に、ギヤラクシアンの指名を受けている。

帝政を研究する識者でなくとも素直な疑問を抱くのだが、皇帝ま

たはIMSを任命されたときに彼らが「拒否」した形跡が見られない。あのヨーインですら、仕組まれた離反の感が否めないという。ならば、カールシアが召喚された折りは、どうだったと言っただろうか。

8 呼ばれる者

サンド・ルーヴェエと言う惑星は、皇帝養成学校の異名をとる、帝政共同体の最高学府^{エリート}「インペリアル・アカデミー」が拠点とする星である。

皇帝養成学校、と言われるようになったのは、歴代皇帝の多くがこのアカデミー出身であった事に由来している。

このアカデミーは特に何の制限も無く自由に入学できる学校であり、“善悪は別として”ありとあらゆる全ての学問が修められる、頑固なほど現場主義の自由な校風を旨としている、とされる。

だから、学生と呼ばれる人々は年齢も貧富も関係なく勉学に励み、研究を行い、起業もするし、それを目当ての企業が現地にコーディネーターも置き、はたまたわざわざアルバイトをして苦学もし、今までの研究を放り出して政治家の秘書や、王侯貴族の執事、民生議会の議員、傭兵、娼婦、星間自治連合へ鞍替え、思わず人生を踏み外したなど、何でもアリの世界である。

それから時々、「ギャラクシアン・グループ」が人材を送り込む、と言った噂も無きにしも非ず。

この辺が実に曲者と言う独断と偏見を持って、しかと覚えておかなければならぬだろう。

こうして多くの世界に多くの人材を輩出してきたから、当然、政治的な力もけて小さくは無い。だが、小さくは無いと言っても、帝政共同体では「もう一つの権力」と呼ばれる「教育権」というものが存在し、一応は仁法院の管轄下である形をとってはいるが、皇帝の大権とは別の意味で既に政治力以上の権限を持っている。

このように帝政は「三権」のほかに「大権」と「教育権」があるのだ。

さて、その日彼らは、農作物の収穫に農業区へ行っていた。

トウモロコシ、と言う植物なのだが、初めて手をつけたものだった。

たので、荒地を改良するところから始めた、イチから自分達で資料を漁って苦慮した上の、喜びの“秋の収穫”になるはずだった。

機械を使わずに手作業で苦勞をする。

長靴を履き手袋をつけてメリメリを実の付いた長細いのを、太い茎から引っぺがした。「あとで焼いたり、茹でたりして食べてみよう」と愉しみにしながら。

美しい淡い黄金色の実がこぼれそうに一直線に並んでいる様は、なかなか自分でも嬉しく、夢中になった。だから、畑の端に小型の連絡艇が着陸した事には気付きもしなかった。

「おい、呼んでるぞ」

フィに後ろから声を掛けられて、ビックリして振り返る。

「……なに？」

「連絡艇が来てるんだけど、何だか緊急の用事だって 学長が」

「えっ？ 学長？」

それは少し困った。

学長には会った事が無いし、見たことも無いからだ。

「……なんか、やらかした？」

「自分の事を他人に聞くなよ」

ああ、そうか、そう言いながら、ちよつと行ってくる、と場を離れた。

トウモロコシの林を抜けて連絡艇に近寄ると、多分アカデミーの職員だろう男が二人、待機していた。

「すみません。お待たせしま」

声をかける間も無く二人に「早く早く」と急かされる。

後部座席に乗り込むと、間をおかず連絡艇は上昇して来た方向へと戻った。アカデミーの本部へと飛行する間、ずっと（チューブ・トレインの方が良いんだけどな）と幾度も思ったが、それは口にしてないよう努力しながら。

「今すぐ首都星ルエラに向かって下さい」

アカデミー本部の学長室に、泥だらけの長靴を履きトウモロコシ

の毛がくつついた手袋を持ったまま、初めて会った学長の開口一番に用事を言いつけられた。初めましての挨拶も無しにだ。

「……今すぐって言うのは、今すぐですか？」

仕方が無いからオウム返しにだつてなる。

「その通りです。超高速艇の席も指定されてありますので、それでルエラに、いま、すぐ」

有無を言わさない雰囲気である。

「質問は」

「少しだけなら許可します」

「誰が、何の用事で、何故、私が」

上品そうな紳士風情の学長は、せわしなく答える。

「質問が多すぎます。貴女をルエラに寄越すように仰られた方は明かせません。その依頼内容も言えません。とにかく貴女を指定の場所へと、そういうことです」

「……私の意思是」

「反映されません」

そんな強引な！

普通なら反発もしようが、おおらかな(?)性格は、特に青少年にありがちな刺々しさを現すことは無かった。

何となく、素直に言う事を聞いてしまった。

そして学長は、荷物をまとめに行こうとする背中に、「ルエラで皇宮^{こうきゆう}行きのシャトルに乗り換えるんですよ」と投げた。

「あれがルエラですね？」

その惑星に向かう便の船で、カロールシアは心なしか楽しそうに隣席の男に言った。

「そう。行ったことはないのかね」

タンザナイトの光を湛えたプラチナの瞳と、グレイッシュブルーの長い髪をした若い女性に話しかけられて、断るわけがなく中年のラフな格好をした男が答えた。

まだ記念メダルのような大きさにしか見えない星を、目ざとく指さす。

「小さい頃に住んでたことはあるのですが、あまり記憶がないので」

「どちらから？」

「サンド・ルーヴェエからです」

「もしかしてインペリアル・アカデミーの学生さん？」

「ええ。あまり勉強できませんけど」

屈託なく彼女は笑った。

「それは凄い。在籍してるだけで羨望せんぼうの的まとだ」

「周りの人たちは凄いですよ」

彼の興味は先程より少しそられてきたようだった。

「私のように行きたくても行けないものもいるんですよ。ルエラにはどうして？」

「…懐かしい人たちに会えるんです。とても久しぶりに」

惑星ルエラは船のスピードに比例して、驚くほど大きさを増してきた。

気が早く乗客が降りる準備をするのをわかっているように、注意を促す船内放送が流れる。

「私は仕事でしてね」

男は質問を止めて自分のことを話す。

「エンジニアをやってるんですけど、本社命令でルエラに」

「出張ですか」

「長期ですよ。家族が私のことを忘れなければいいが」
さて、と男も下船の準備を始めた。

既にルエラは足元に見えていた。

「あなたも乗換えトランシットを？」

「そうしなきゃ行けないみたいで」

船はルエラに直接降下せず、上空に浮かぶステーションに接岸する。

じゃ、とカロールシアは短い旅の友と別れてステップを降りた。

『お足元にご注意ください ルエラによっこそ』

ざわめくステーション館内を、カロールシアは乗り換えるべき便の方向へ歩く。

途中、行き方が判りにくかったようのでステーションの職員に尋ねた。

「0番ゲートはどちらに？」

カウンターでハツと顔を上げた職員は、カロールシアの顔を見てわずかに首を傾げたが、すぐに方向を指し示した。

「0番ゲートは専用のエレベーターがございます。そちらの通路を奥に行きますと、エレベーター行きのスライド・ウェイがありますので

最後まででは聞かずに、彼女は歩き出した。

「0番だなんて…ホントに特別なんだな…」

専用エレベータを降下しながら、下層を眺めた。

到着したゲートには窓越しに、乗客数には不釣り合いな大きさのシヤトルが待機している。

「カロールシア・デッサーです。今日、この船に乗船予定なのですが」
ロビーに立つ警備兵を気にしながら、通常のゲートより重々しい雰囲気緊張した。

「ご予約は承っております。どうぞ」

彼女のIDクリスタルを照会して、パーサーは笑顔を返した。

「ありがとうございます」

通路から船内まで警備兵の間を縫って、作りとしては少々豪華な席につく。

(嚴重だ…すごいな)

彼女に挨拶をして脇を通り過ぎたパイロットまでが、何となく威厳に満ちているのは気のせいだろうか？

暫くして揺れもなく静かにシヤトルは発進した。

このように嚴重な警戒態勢が敷かれている、0番ゲートから出た

いかにも専用のな特別機が向かう先は、皇宮アクアパレスである。

一般人は直接皇宮アクアパレスに入ることにはできないために面倒な手順を踏むのだが、そのようなところに何故カロールシアが呼ばれたか、はつきりした理由は判らなかつた。

間も無く巨大な浮遊物にシャトルは滑り込み、丁重な出迎えを受けてカロールシアはようやく到着したのである。

「ようこそ皇宮アクアパレスへ お待ちしておりましたカロールシア様」

「荷物は我々がお持ちします」

「リニアのご用意がございます。こちらへ」

またもや警備兵が連なり、彼女は肩をすくめて嘆息した。

出迎えの人々も世俗的ではない雰囲気を持つ。逃げる気はないが、逃げようにも足が勝手に金縛りで動かなそうな、重厚な雰囲気だつた。

「あの…これから…？」

のしかかりそうな空気の中、彼らに自分の行く末を尋ねる。

「このご滞在で使われます部屋にご案内致します。なにか不都合がございましたら申し付け下さいませ」

皇帝と帝政の機密を閉じ込めた、この皇宮は勝手に出歩けないと言ふ事だ。

「……………どうも」

カロールシアには、それしか言えなかつた。

質問しようにも質問の内容が思い浮かばなかつたし、必要も無さそうだったからだ。

リニアに乗り換えて、皇宮内を走る。

「明日でございますが、“シェーデの間”へお連れするように仰せつかつてございます。その理由について私どもは詳細を知らされておりません」

まるで口を慎め、と言われたようだった。

「……………」

アクアパレス
皇宮は広い。

都市一つをを外殻で覆ったような構造をしているので、空や宇宙が見えない事を除けば、充分に都市としての機能を果たしており、キシュトワルとは様相を異にする「もう一つの首都」である。

リニアはカロールシアの耳元に風の音だけを立てて、そのスピードを緩め、止まった。

一人が荷を持ち、一人がカロールシアより先に降りる。

豪華なホテルになりそうなホールだ。それ相応の人物がここに来るのだろうが、彼女には身分不相応な感じで気が引ける。

ホールを抜けてカツカツと歩くと、そのうちの一部屋前に歩を止めた。

すでに警備兵がドア前で任務に着いており、確認を取ると彼らがドアを開いてくれる。

天井高く内装豪華で、「住む」としても十分な設備を整えていた。「ここにお荷物を。連絡はこの案内ロボットに。それから申し訳ありませんが、この部屋から外出は禁じられております。ご諒承くださいませ」

なんだか一方的に押し付けて、カロールシアを一人にしてしまった。と言うか 外出を禁止されても申し分ない広さだし、充分に探検を楽しめそうだし、案内ロボットも監視役だろうし、ちよつと自分も色々と考えを整理したいし……。

ちよつと立ち尽くして小首を傾げていたが、長距離移動の疲れを覚えて傍らの荷台に腰を下ろした。

(アカデミーの学長に呼ばれて、往復のチケットを寄越して、ええと、なんだっけ、そう、急いで荷物まとめて超高速船に乗ったのはいいけど……)

思い出すにも手間取るくらい、何が何だか分からないうちに急な話だったようだ。

(だいたい…皇宮に来る理由って何だろう?)

ひよいと立って、奥の部屋へと足を進める。

重いカーテンを持ち上げると、今来た宇宙の景色が眼前に広がっていた。

「ああ、そうか……」
独り納得する。

こんな自分が落ち着いているのは、違和感が無いせいだ。
ここに流れている空気は、随分前から知ってる気がする。

(普通なら萎縮してしまう場所なのだけど……この馴染みよう、
なんだか変だな……)

そんな自分のおかしさに、笑いがこみ上げた。

まいったなあ。なんだろコレ。住み慣れてるよ。

そして唐突に思い出す。

(グランスも、ここに居るんだ……)

数年に一度とか、年に数度しか会わない人物であるが、どうしてか父よりも身近な存在である。

それに何故か、ミナヅキ兄妹とグランスと自分との組合せによる団欒が、いつも思い出の中にあるのだ。その遠くに、いつも何かの影が見えていた気もするのだが……。

その思い出に浸りたくなかった。が、食事メニューを聞いてくる案内ロボットの音声に、現実に引き戻されるのだった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1262e/>

“Galactic ILLUSION” (銀河幻想) The ORPAHN III

2008年11月7日06時58分発行